

4. 求められる「人格教育」、大切にされない「授業」

不況下にもかかわらず、高校生は学校に進路指導以上に人格教育を求めるようになってい
る。しかし、「授業」は高校生にとってあまり重みのないイベントとなってしまった。

(1) 高校教育に期待するもの

高校生が「高校教育の指導に期待するもの」は何なのだろうか。前回調査と同じ設問で
尋ねてみた(Q.39)。前回調査では「知識・教養」、「進路」、「人格形成」が、ほぼ三分して
いた。実際にはこれらは大きく重なり合っているが、あえて択一式の選択を要求している
のは、時代の雰囲気を読み出す意図がある。事前の予想は、不景気の只中で、「進路」が増
えているのではないかというものだった。

しかし、その予想は外れた。「知識・教養」、「進路」がともに若干減って、「人格形成」
が増えたのである。

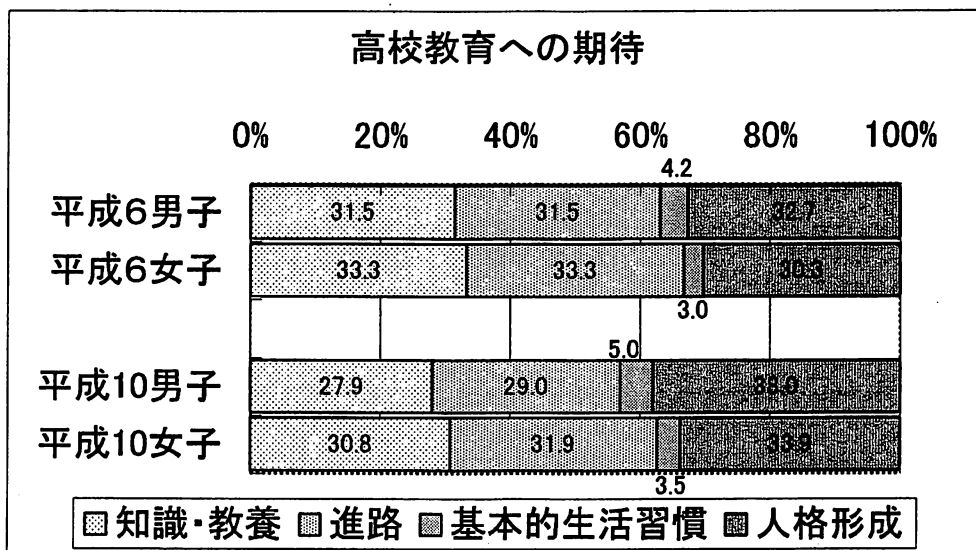


図2-4-1. 高校教育に期待するもの 平成6年度・10年度

「進路」というと、厳しい求人状況の中で就職を斡旋したり、偏差値で大学の合否を占
ったりするイメージが強いかもしれない。実際には、もっと多様な進路指導、キャリアガ
イダンスが行われているはずであるが、逆に、「人格形成」というとやや曖昧で、実際には
何を指してそう呼んでいるのか分からない面もある。

しかし、高校生が不況下でかえって「進路」よりも「人格形成」を選ぶのはなぜなのだ
ろうか。一流大学・一流企業に進学・就職することよりも、より地に足をつけて自己探求
を深め、自己形成を図りたいと願っていると読みたいのがわれわれの立場ではあるが、し
かし、この後の質問項目の集計結果からは、必ずしもそうとは言い切れないものを感じさ
せる。

(2)「授業」に対する基本的構え

今回の調査では、学校の授業や行事を休んだり遅刻したりすることはよいかどうかを尋ねている(Q. 40-42)。その結果は、われわれの予想を上回るほどに、高校生にとっての「授業」の意味の「軽さ」を、教師であるわれわれに突きつけるものであった。

「自分の考えで授業を欠席してよい」と答える生徒は 37.3%、「どちらかといえば」まで含めると、ほぼ6割に達する(Q. 40)。さらに、授業よりも行事のほうが欠席はよくない(Q. 41)、欠席するよりも遅刻するほうがよくない(Q. 42)。日々の授業は、生徒たちにとってどれほどの充実感を与え得ているのだろうか。

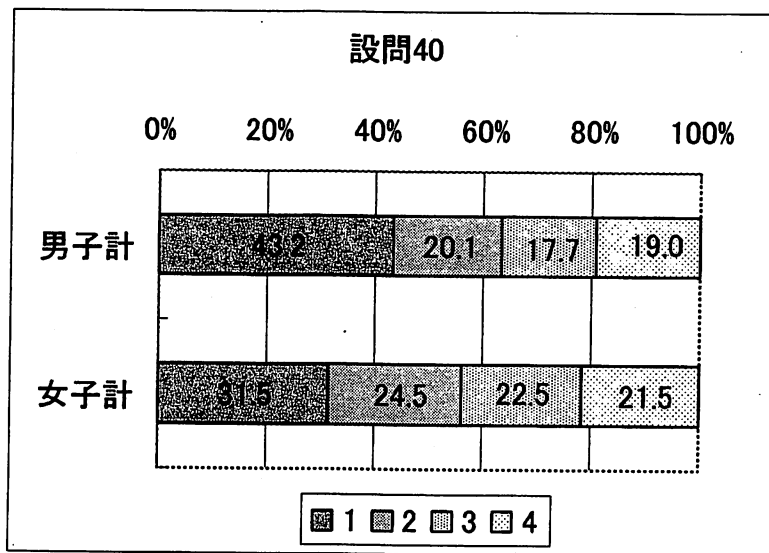


図 2-4-2. 「授業を自分の考えで休んでよいか」

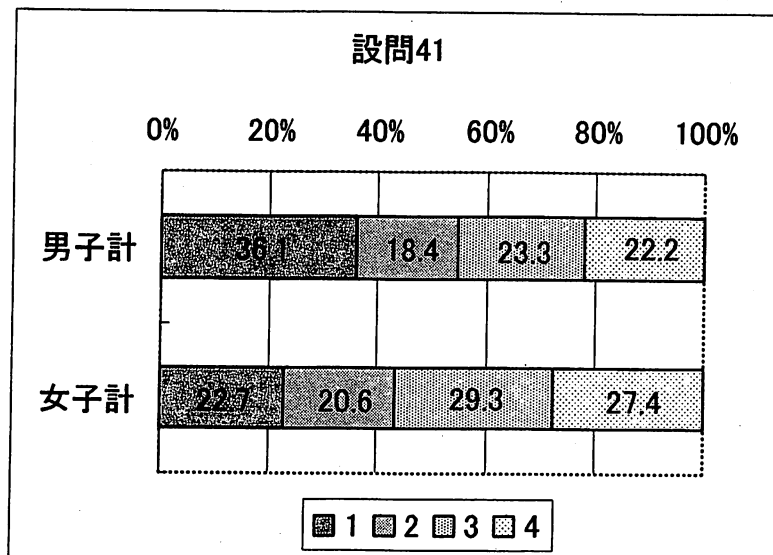


図 2-4-3. 「学校行事を自分の考えで休んでよいか」

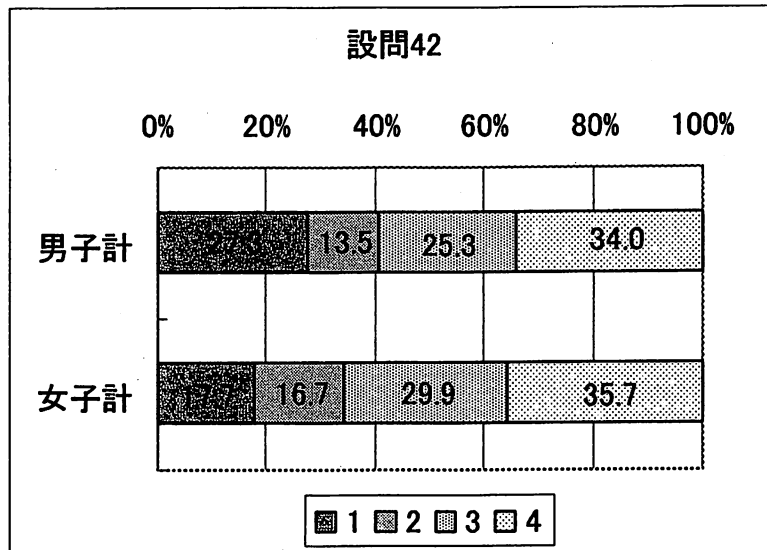


図 2-4-4. 「授業を自分の考えで遅刻してよいか」

「学校生活で生き方を考えさせられた場面」(Q. 44)にしても、「授業」という答えは前回も 15.2%と少なかったが、今回は 10.9%と、さらに減ってしまっている。ちなみにこの答えで圧倒的に多いのが「友人」の 63.4% (前回 60.4%) である。

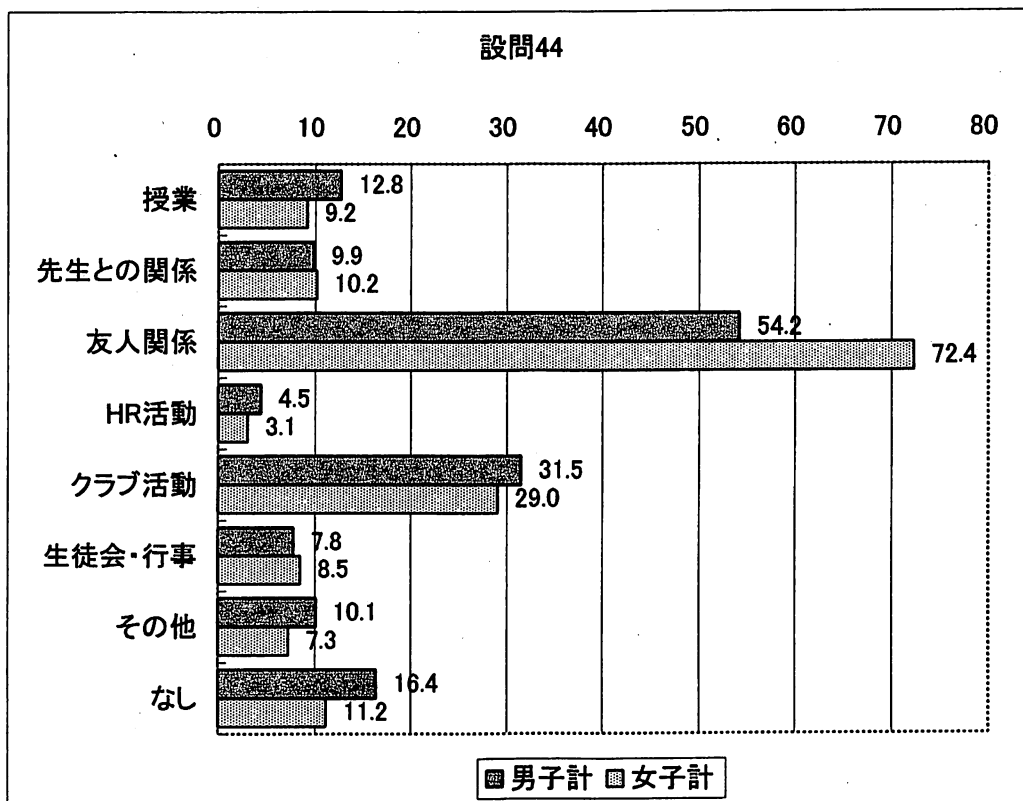


図 2-4-5. 「学校生活で生き方考え方を考えさせられた場面」

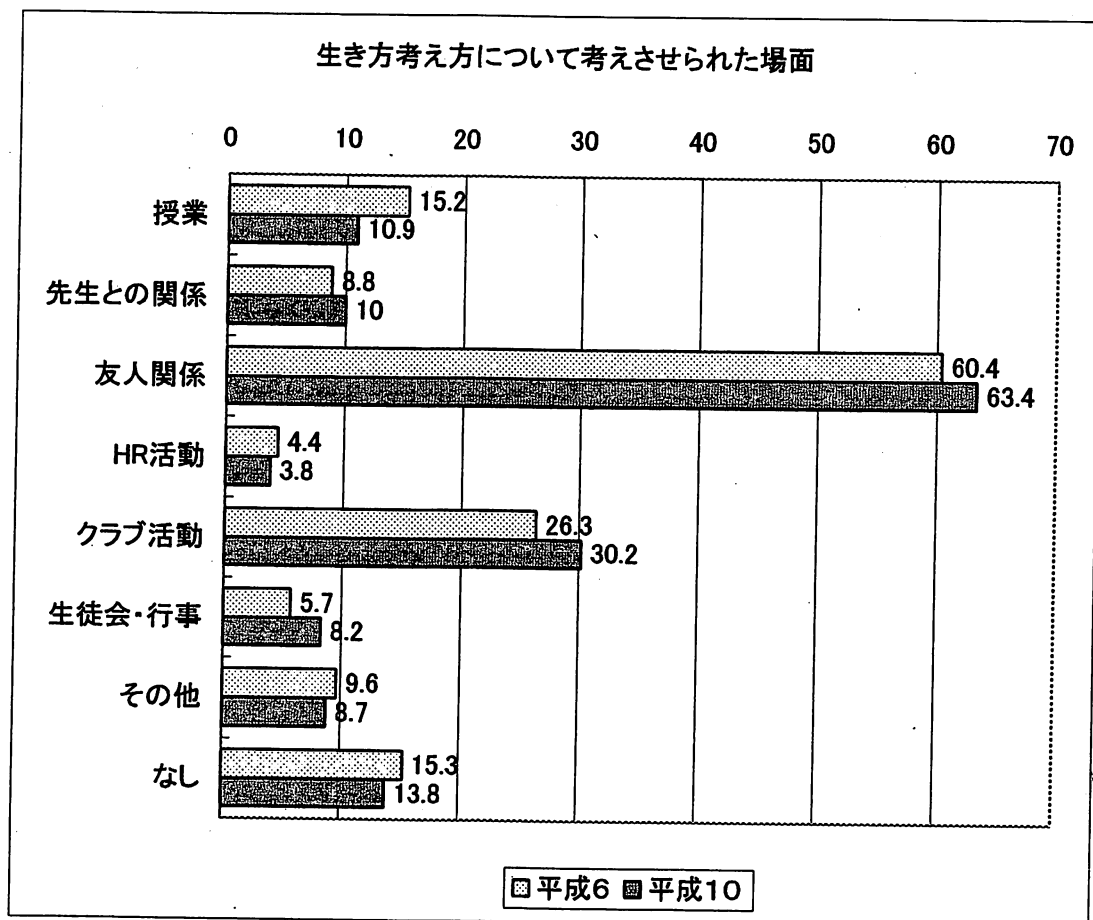


図 2-4-6. 「学校生活で生き方考え方を考えさせられた場面」 平成6年度・10年度

高校生にとって、学校という場所は何なのだろうか。教師という存在は何なのだろうか。授業というイベントは何なのだろうか。高校の指導に「人格形成」を求めた生徒たちは、「具体的には」何を学校や教師に求めているのだろうか。あるいは、「知識・教養」や「進路」の指導に対する期待が低下したための「人格教育」なのだろうか。それでなくとも、授業が充実感を与えていない時にも、学校は本当に「人格形成」の場として機能できるのだろうか。

5. 心配だらけの「これからの社会」

圧倒的な「環境問題」に次いで、「失業・雇用問題」、「国際関係や戦争」、「非行・犯罪」、「日本の経済」が将来の心配事。

(1) 調査項目について

「これからの社会で不安なこと」(Q.45)は、これまでの調査で繰り返し尋ねてきたものである。但し、その時々々の情勢にあわせて、若干の異動がある。今回は、前回比較的回答数の少なかった「食糧問題」と「人口問題」を一本化し、新たに「失業・雇用問題」を加えた。

さらに大きな変更点は、これまで「二つまで」の複数回答であったものを、他の設問との軽重を考へて、「三つまで」にしたことである。したがって、従来の調査との比較は、厳密にはむずかしくなったが、その増えた分の選択がどこに回ったかに注目すれば、今回調査の結果の特徴はかえって捉えやすいかもしれないと予想した。

(2) 結果

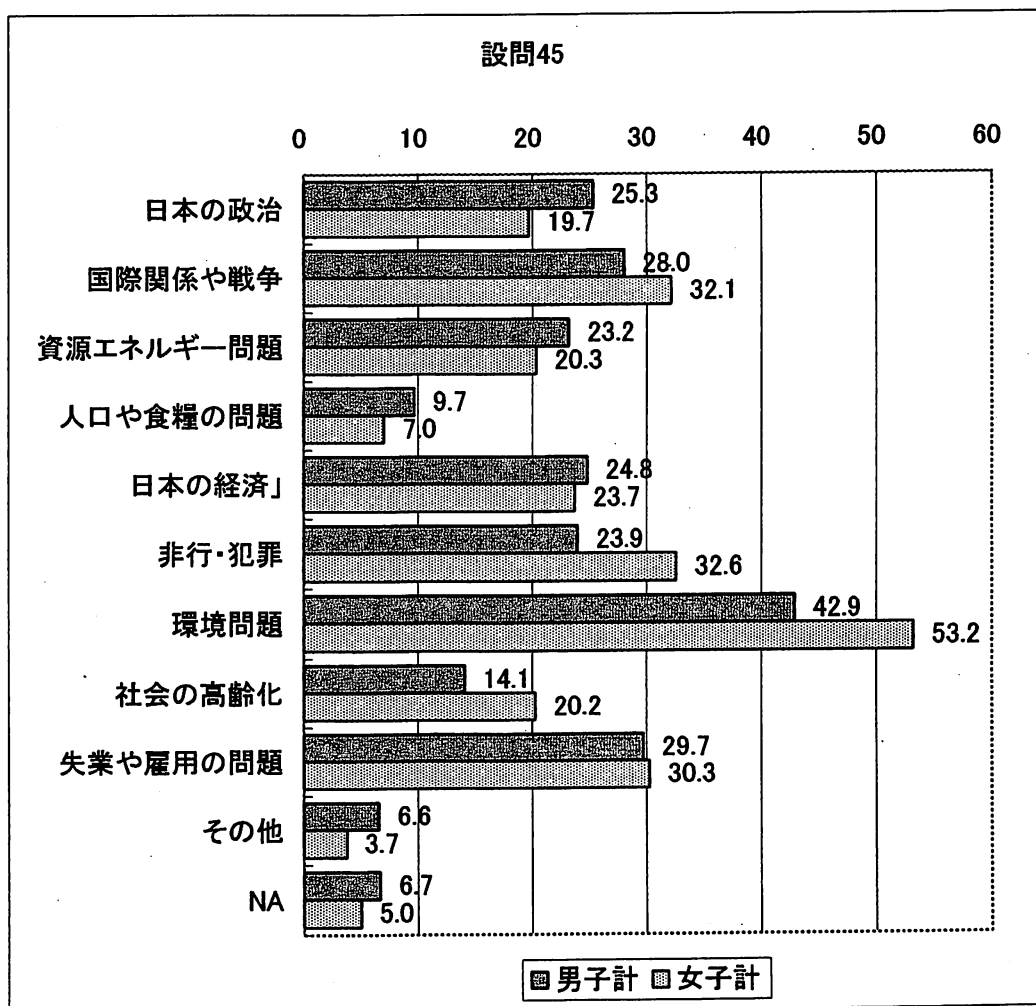


図 2-5-1. 「これからの社会について不安なこと」

「環境問題」は、これまでの調査で常にトップである。しかし、前回 51.5%から今回 48.2%と、わずかに下回っていて、新たな選択が加わっていないことが分かる。

「失業・雇用問題」は、初登場で 30.0%と、いきなり二番手につけた。「国際関係や戦争」の 30.1%、「非行・犯罪」の 28.3%とほぼ並んでいて、これらもまた大きく票を伸ばした項目である。

「日本の経済」が 24.2%とこれらに続くが、前回 10.1%から二倍以上の伸びである。

高校生のこのような「不安」は、世相をよく反映していると言える。不安なしを含むノーマークは 6%に満たないのである。しかしまた、若干減ったとはいえ「環境問題」に対する圧倒的な数の票は、決して目先の問題ばかりに囚われているわけでもなく、健全な批判精神が根付いているのかもしれない。

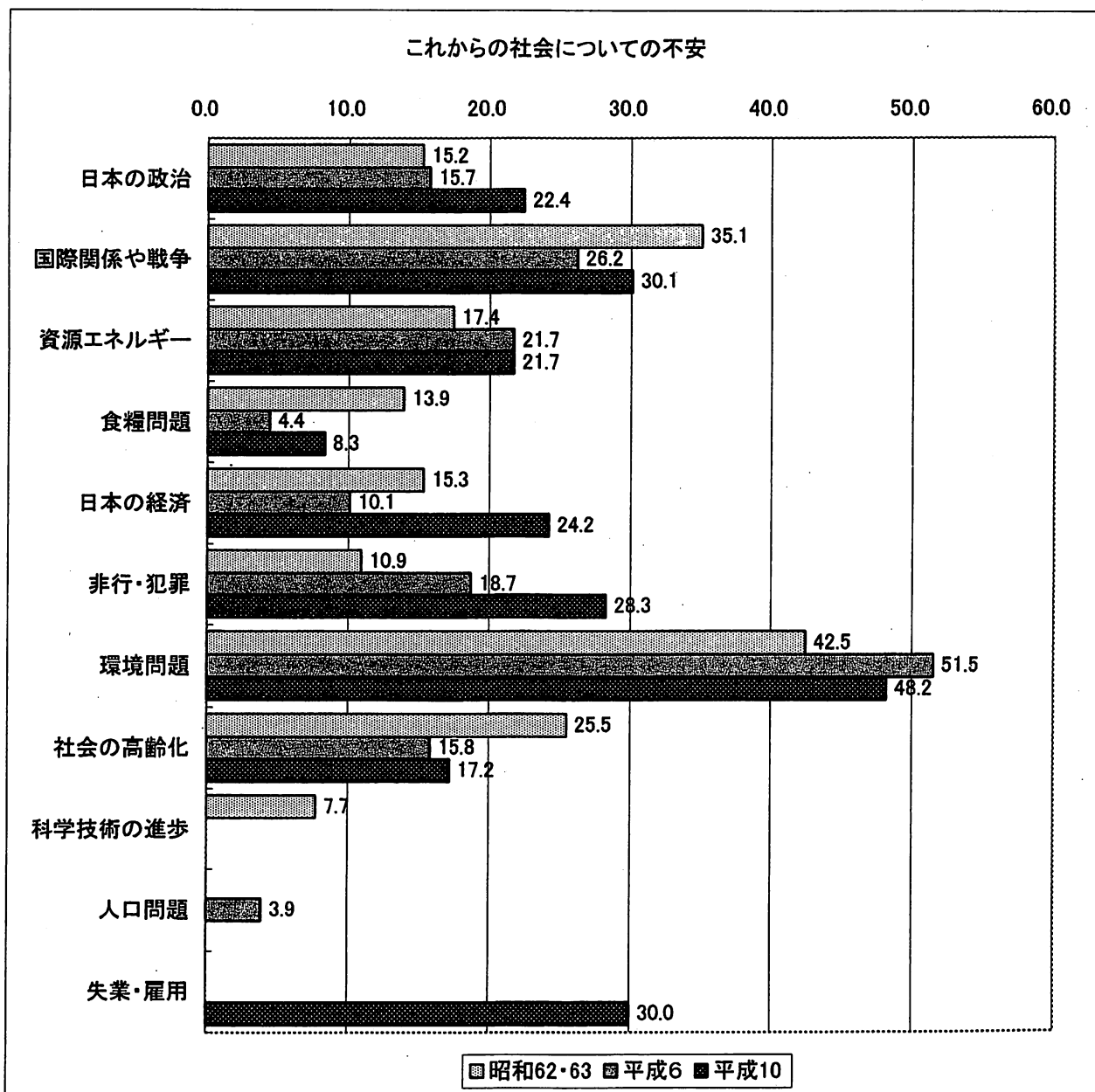


図 2-5-2. 「これからの社会について不安なこと」昭和 62・63、平成6、平成10年度

6. 急激に伸びた女子の「職業志向」と家事育児の「平等志向」

男子を上回る強い「職業志向」が、特に今回の調査で明確に出た。家庭における家事育児の分担は、男女ともに「平等志向」が大きく伸びたが、女子と男子の意識のギャップは依然として残っている。「夫婦別姓」については、あまり関心が持たれていない。

(1) 生きていく上で大切にしたいこと

高校生がこれから「生きていく上で大切にしたい」と考えていることは何か(Q.46)。男子で最も多いのが「好きに暮らす」31.9%、次いで「家庭生活」30.7%、「職業生活」は10%以上離されて第三位19.1%に過ぎない。

女子では「家庭生活」41.0%ともっとも多いが、次いで「職業生活」25.6%、「好きに暮らす」は23.8%で三位となる。

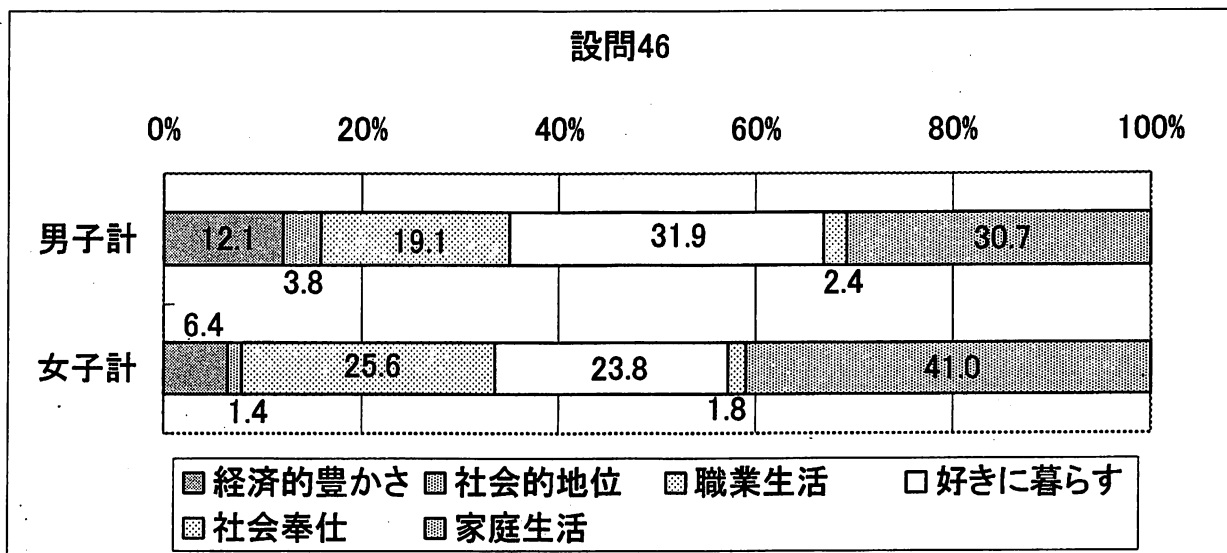


図 2-6-1. 「生きていく上で大切にしたいこと」

注目すべきはやはり、男子よりも女子のほうに「職業生活」志向の割合が高いということである。平成6年度の前回調査では女子は15.2%に過ぎなかったから、10%以上の伸びである。法改正の影響も含めてきわめて敏感に女子の職業意識は高まっていると思われる。

また、全体的にみて、前回調査で高まっていた「家庭生活」志向が、今回調査では弱まり、男子も含めて「職業生活」志向が高まっている。「経済的成功」は減りつつけているのに対して、「職業生活」22.4%は昭和62・63年度の調査さえ上回る数字である。不景気の中にあってやりがいのある仕事が切実に求められているのではないか。「家庭生活」の割合が低下したのも、まず仕事が安定しないと、という現実志向のあらわれではないか。フリーターが好まれるように言われているが、データの動きには案外、堅実さが見て取れる。「好

きに暮らす」は、ここまでの調査でいつもほぼ 28%ほどの数字で、ほとんど変化がないのである。

なお、過去の調査との比較は下図の通りであるが、平成4年度のみ一つの質問項目が異なるものと入れ替わっているため、比較には留保が必要である。

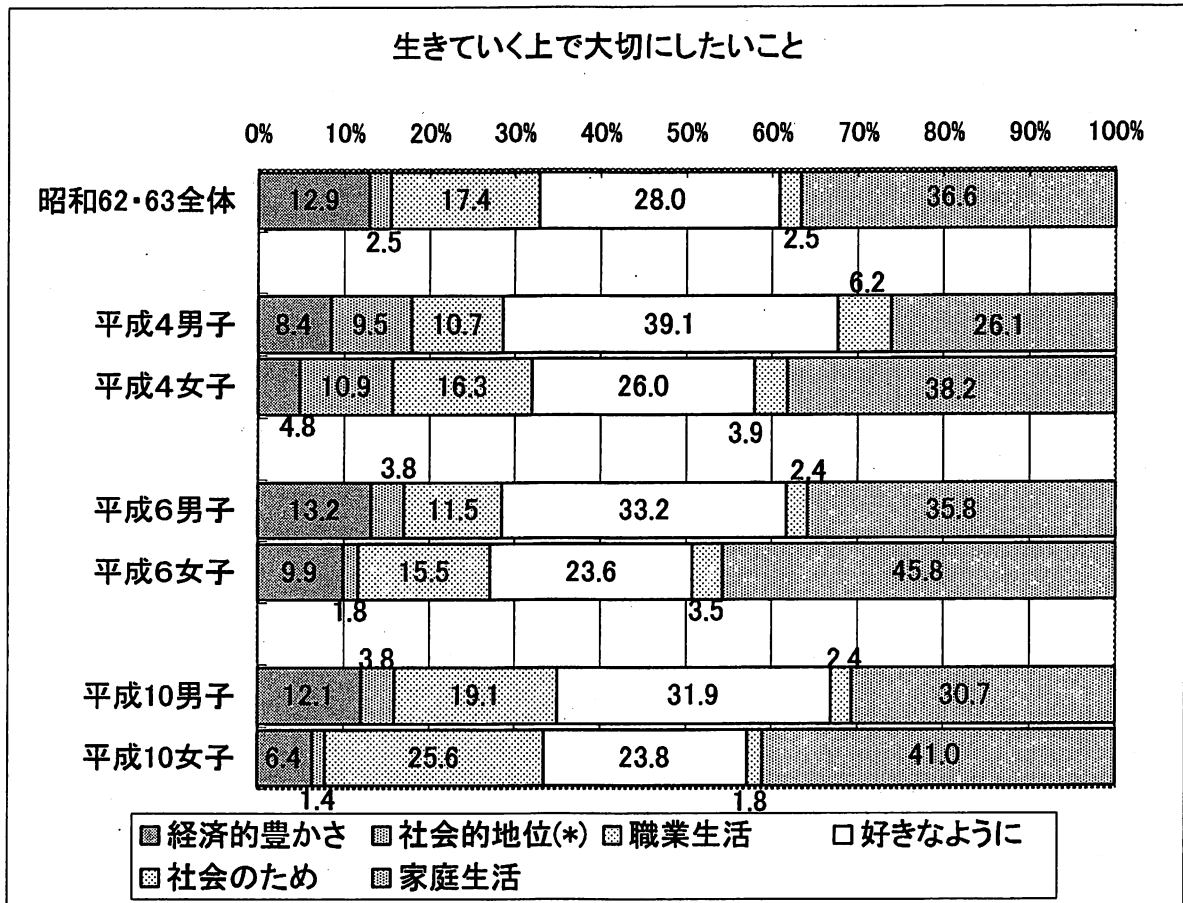


図 2-6-2. 「生きていく上で大切にしたいこと」4回の比較

(*平成4年度のみ「職場の内外に気持ちの交流する人間関係を作る」)

(2) 結婚後の家事育児の分担

「結婚後の家事育児の分担」(Q.47)について、男子は、「職業専念」と「職業重点」を合わせた数字は、平成6年度調査で54.3%だったものが、今回調査では43.1%と、ついに半数を切った。減った分の約10%はほぼ「公平分担」に回っている(前回43.4%→今回54.9%)。

一方の女子も「家事育児専念」と「家事育児重点」を合わせた数字が45.0%から36.7%とかなり減り、やはり「公平分担」が52.0%から61.5%へと増えている。つまり男女とも、10%近い「公平分担」へのシフトが起こっており、これはかなり大きな変化と言える。

しかし、前回もそうだったのだが、男女間にあるギャップは埋められていない。単純に言えば、「職業専念」・「職業重点」志向の男子よりも、「家事育児専念」・「家事育児重点」志向の女子は少ないし、「平等志向」の男子は女子よりも少ない。

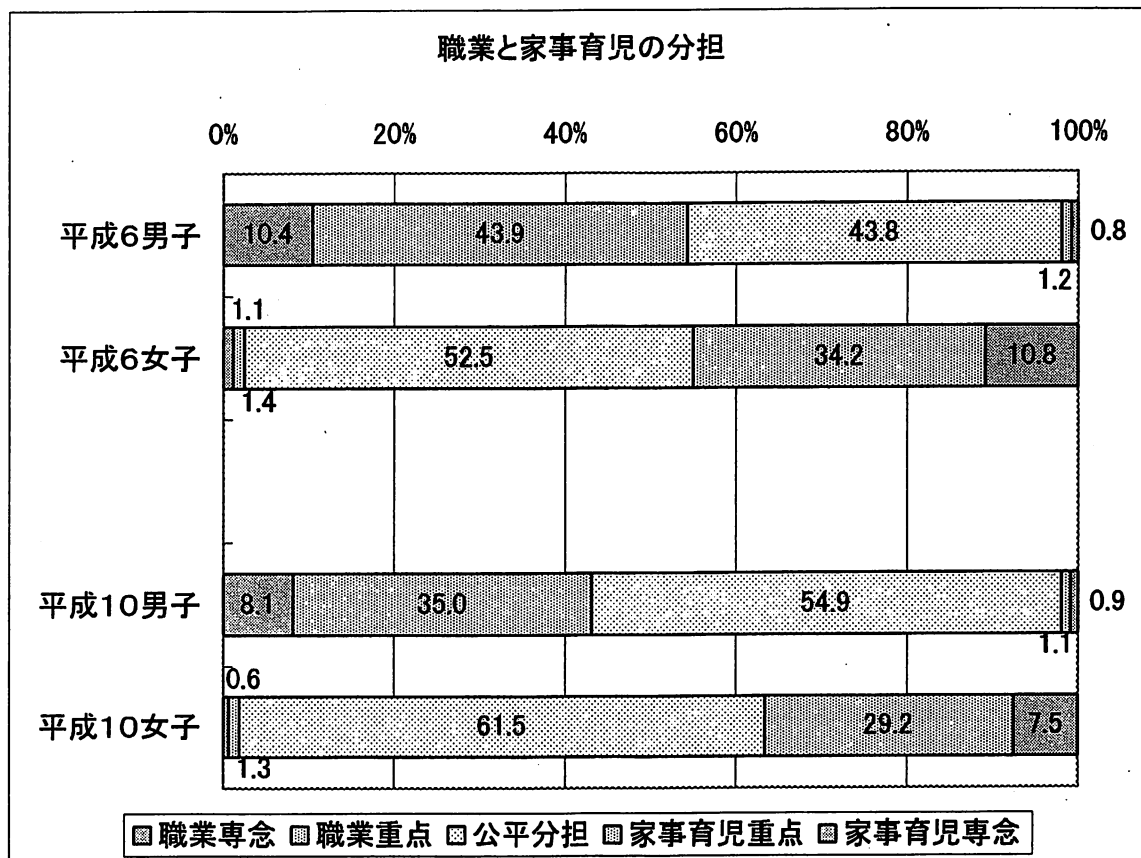


図 2-6-3. 「結婚後の職業・家事育児の分担」 平成6年度 平成10年度

これらのシフトとギャップ、そして前述の女子の「職業志向」の高まりを考え合わせると、これからの結婚や家庭の形成には、カップルのあいだですり合わせ、乗り越えなければならない課題が、より先鋭化してきたと言えそうである。このような傾向は、たとえば非婚の増加のような現象とも関係があるかもしれない。

(3) 結婚後の姓

「夫婦別姓」についての高校生の意識を探るために、前回調査では「同姓・別姓のどちらを原則とするか」という設問の立て方をしたのであるが、形式的な設問にとどまっていた。そこで今回は、「自分自身が」どういう意識でいるかを答えられるように、いくつかの複合的な意見からもっとも近い考え方を選ぶという形式にした(Q. 48)。

女子は、「同姓に賛成で、相手の姓を名乗ってもよい」が 58.0%と過半数を超え、「別姓に賛成だが、相手が望むなら相手の姓を名乗ってもよい」の 24.0%を合わせると、82.0%が相手の姓でよいとしている。

他方、男子は、「同姓に賛成で、相手に自分の姓を名乗ってほしい」が 37.0%と、単独ではもっとも多いが、「同姓に賛成だが、相手が別姓を望めば別姓にする」22.7%、「同姓に賛成で、相手の姓を名乗ってもよい」15.5%と続く。この二つを合わせると、最初の一つを上回る。

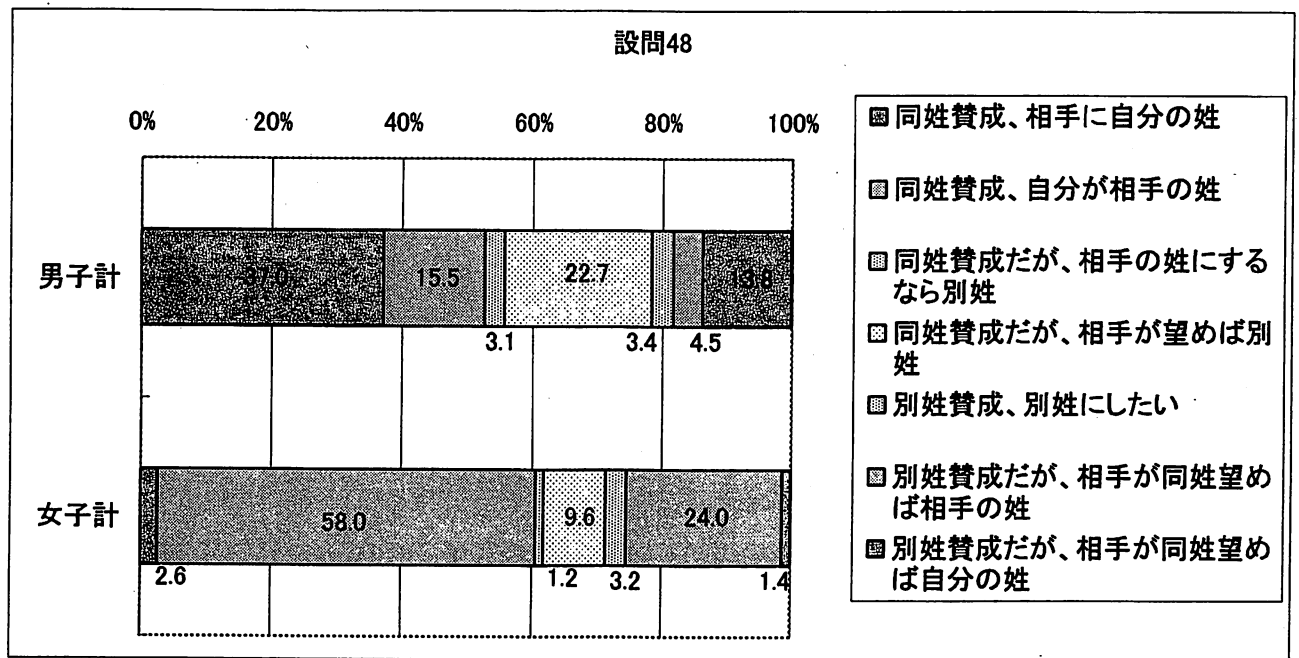


図 2-6-4. 「夫婦の姓」

この結果をどう考えたらよいであろうか。女子が保守的で、男子がやや進歩的なのだろうか。むしろ、「高校生は、あまり姓にこだわっていない」というあたりが、妥当な解釈なのではないか。もちろん、現実の結婚に直面したときには、仕事の都合や親の意見も絡んで、決して簡単にはいかないであろう。それにしても、家事育児の公平分担志向の伸びに比べて、姓の問題はあまり関心もたれていないようであり、別姓を推進する側、同姓にこだわる側のいずれの声も、高校生にはあまり届いていないように思われる。

7. 情報化・国際化意識に変化の兆し

情報化・国際化ともに、やや「さめた見方」が増えてきている？

(1) 高度情報化への期待と不安

前回調査同様、今回も「情報化」についての期待と不安について尋ねている。但し、選択肢を増やし、「なし」を選択肢を用意する代わりに「なければノーマーク」という形式に変えたので、前回調査との比較にはその点注意が必要である。

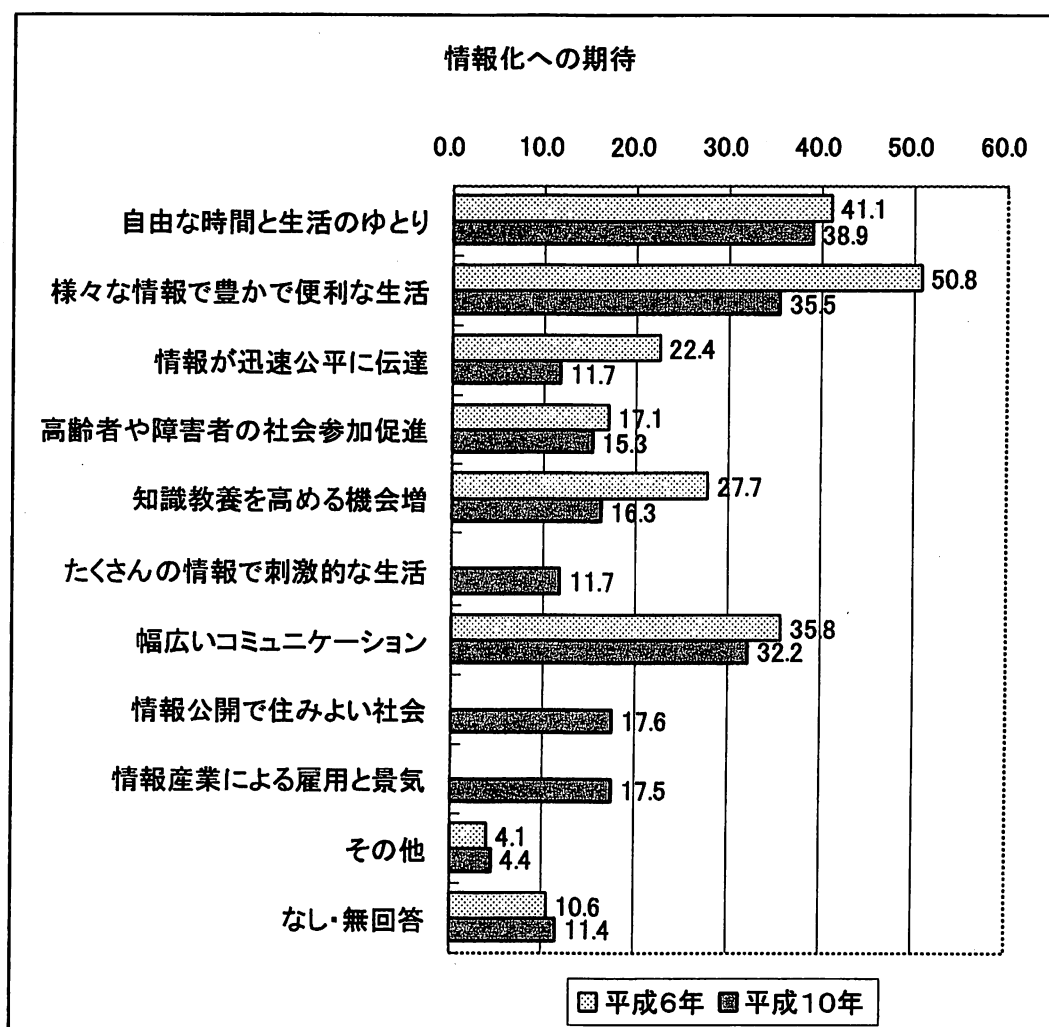


図 2-7-1. 「情報化への期待」

「期待」についてみると、前回調査に比べて全体にやや「さめた」印象を受ける。もちろん、選択肢が増えたのに選択数は3つで同じだから、回答が分散するのは当然なのだが、「豊かさ」や「迅速公平」、「知識教養」の減り方は大きい。ただし、「自由とゆとり」「コミュニケーション」はほぼ横ばいである。ということは、ある程度、焦点が定まってきたのかもしれない。

「不安」のほうも分散傾向があるが、そのなかで「個人情報の漏洩」は増え、「情報犯罪の増加」もほぼ横ばいという結果になった。また、新しく加えた「生身の付き合いの薄れ」も 32.3%と、かなりの不安材料になっているが、このあたりは前回調査よりもより現実味を帯びて経験されるようになってきている可能性もあるだろう。

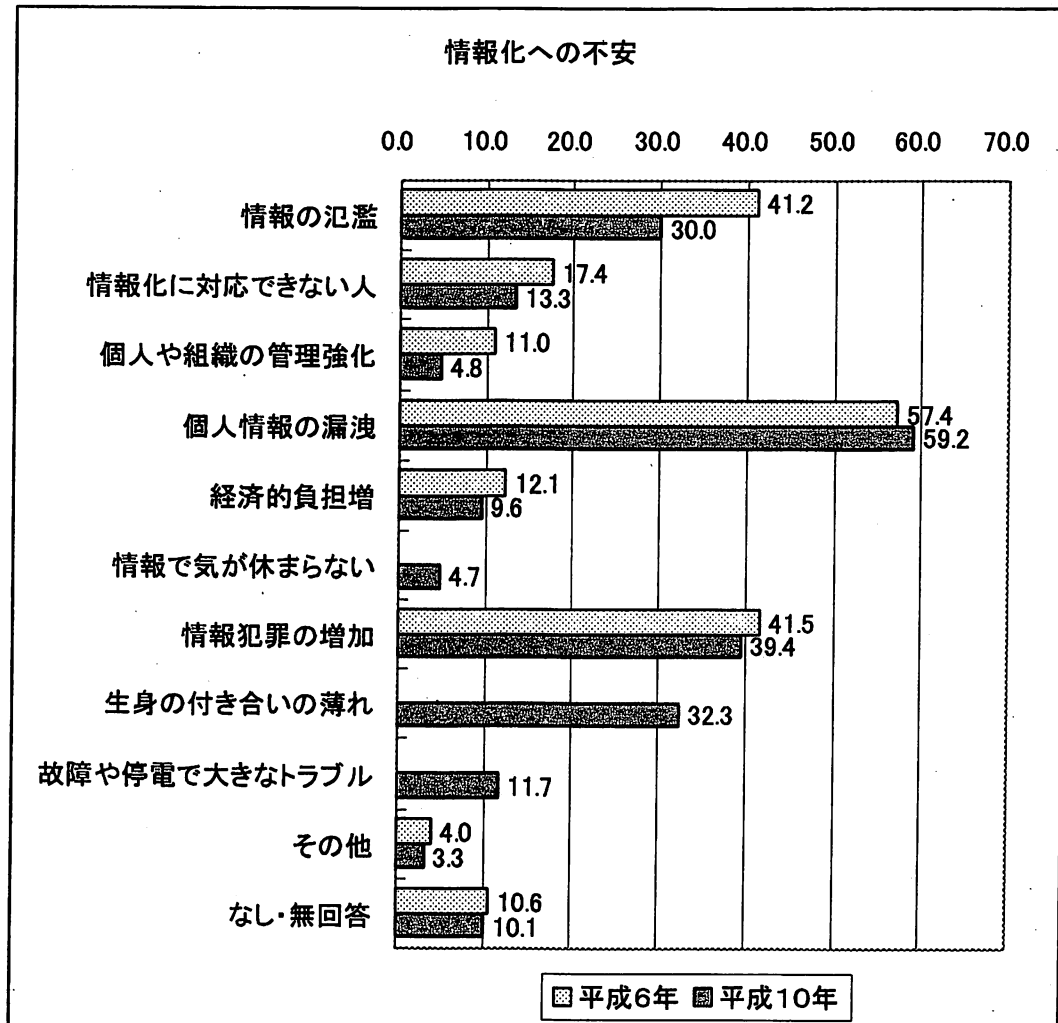


図 2-7-2. 「情報化への不安」

(2) 国際化

今回の調査では、国際化に関する設問は「学校でしてほしいこと」だけの設問になった。したがって、「国際化」そのものに関してはあまり参考にはならないかもしれないが、前回調査との比較データを紹介する。なお、選択肢は前回調査と同数であるが、若干の異同があり、また「なしはノーマーク」を今回明記したので、無回答が増えている。

今回の結果は、「インターネット」を選択肢に入れたので、これが大きく引っ張った印象がある。前回調査と単純に比較すると、実際の交流よりもネット寄りになったとすれば好ましくないという解釈も成り立つが、インターネットの爆発的な普及の影響が大きいことによるものとも考えられ、即断はできない。

ただ、「修学旅行」は微増、「留学」もほぼ横ばいなのに、「留学生の受け入れ」がかなり減っていることには留意しておきたい。これがある種の閉鎖的な風潮につながりかねない兆候でなければよいが、やや警戒すべき点かもしれない。

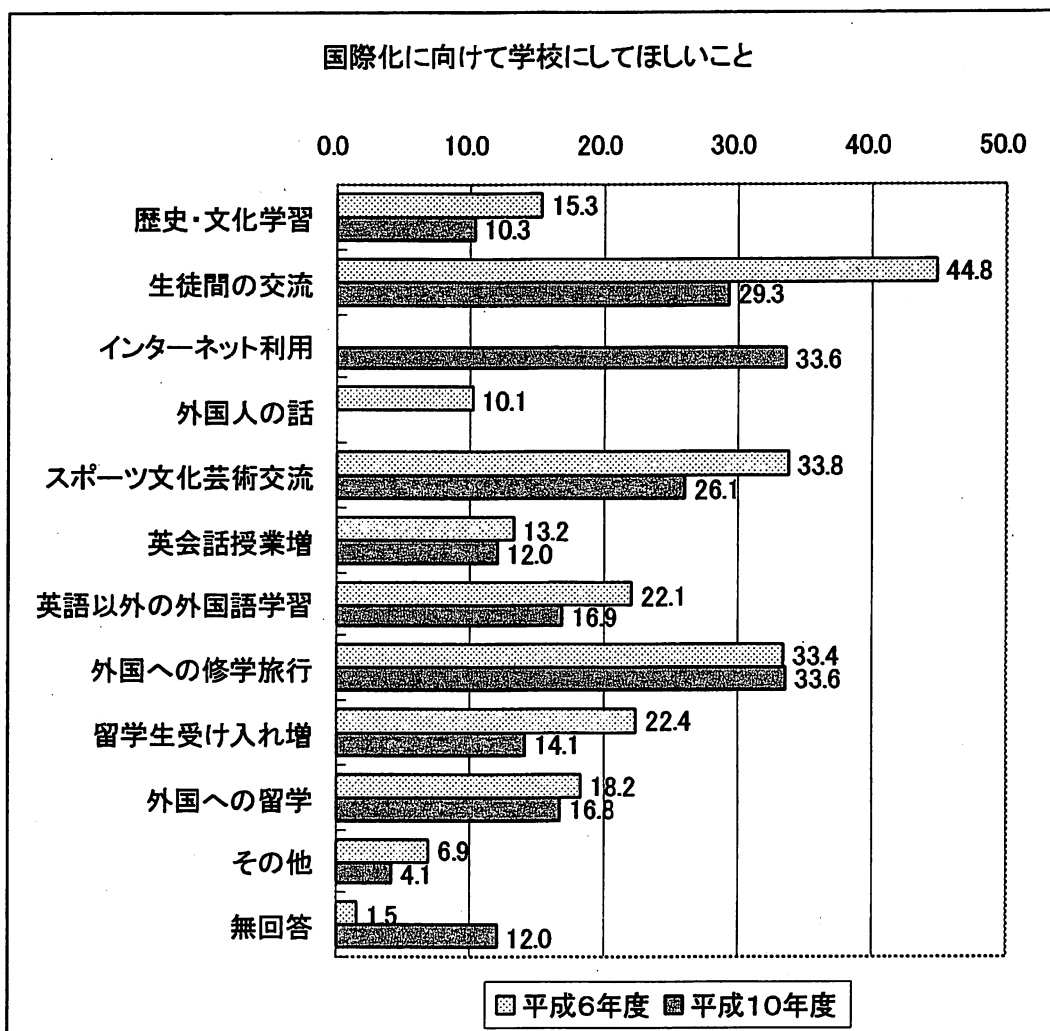


図 2-7-3. 「国際化に向けて学校でしてほしいこと」

8. 高まる「青年心理」への興味

公民科授業でやってほしい授業の「方法」は変化なし。しかし「内容」は、地球的問題や国際は減り、「青年期」が大きく増えた。関心が「内向き」になる傾向？

最後の二つの設問は、前回調査と同じ、公民科の授業の内容と方法についての希望を尋ねている。これは前回調査とまったく同じ項目である。

この結果を見る限り、授業方法については、前回調査とほぼ同じ結果となっている。「討論・ディベート」が微増、「視聴覚・情報機器」が微減しているものの、全体的傾向は驚くほど同じである。講義のような受身の授業ばかりではなく、ディベートなどを望む層も一定数があるので、多様な指導法が期待されるところである。

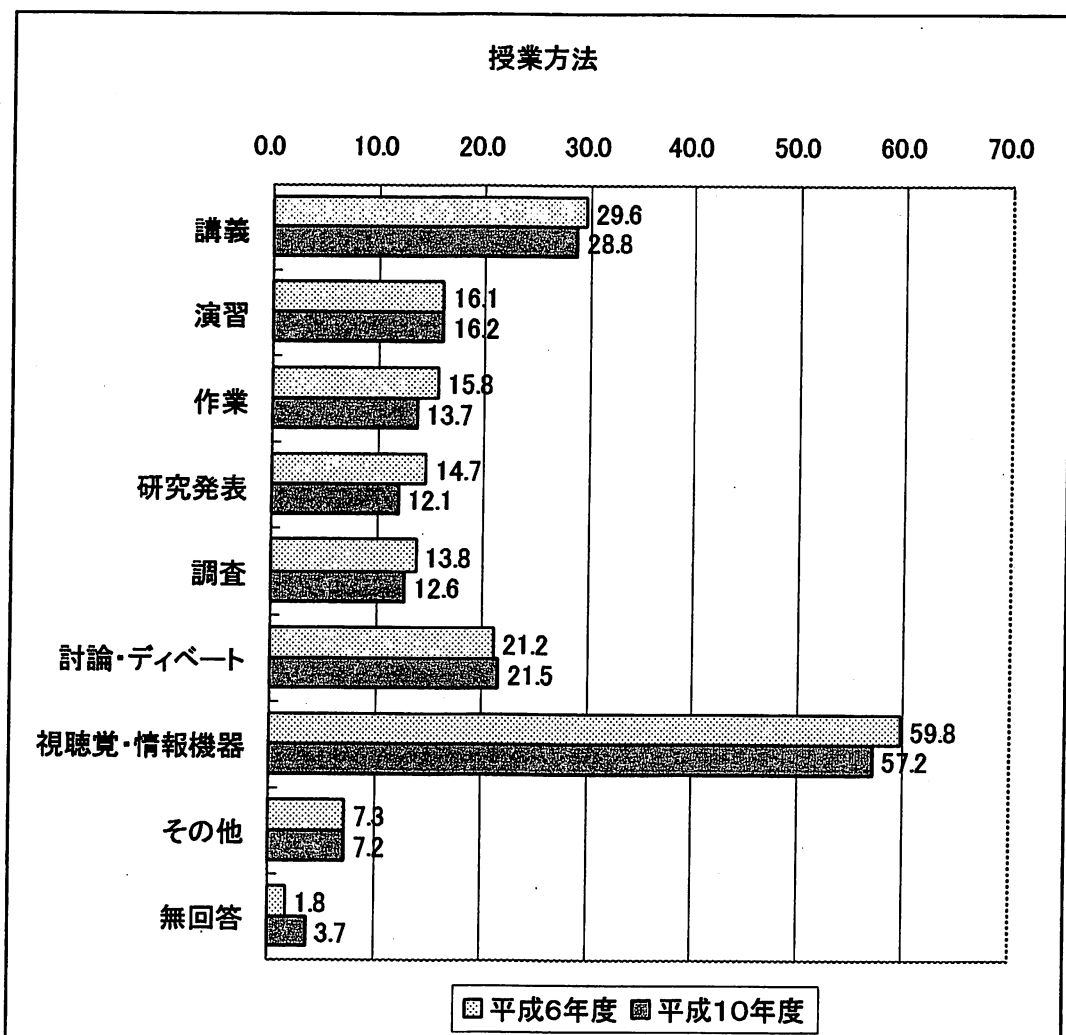


図 2-8-1.. 「公民科の授業でしてほしい授業方法」

授業内容のほうは、若干の動きが見られる。明らかに増えているのは「青年心理」であり、反面いわゆる地球的問題群や文化、国際などが減っている。これも即断はできないが、前項の「国際化」に関しても見られたような「閉鎖的傾向」が、ここにも現われてはいな

いだろうか。大きな問題に取り組んでいくよりも、自分自身の内面に向かっていく、内向的な傾向が強くないか。またそのときに、文化や思想についての興味もあまりないとすれば、やや心配な点がないわけではない。

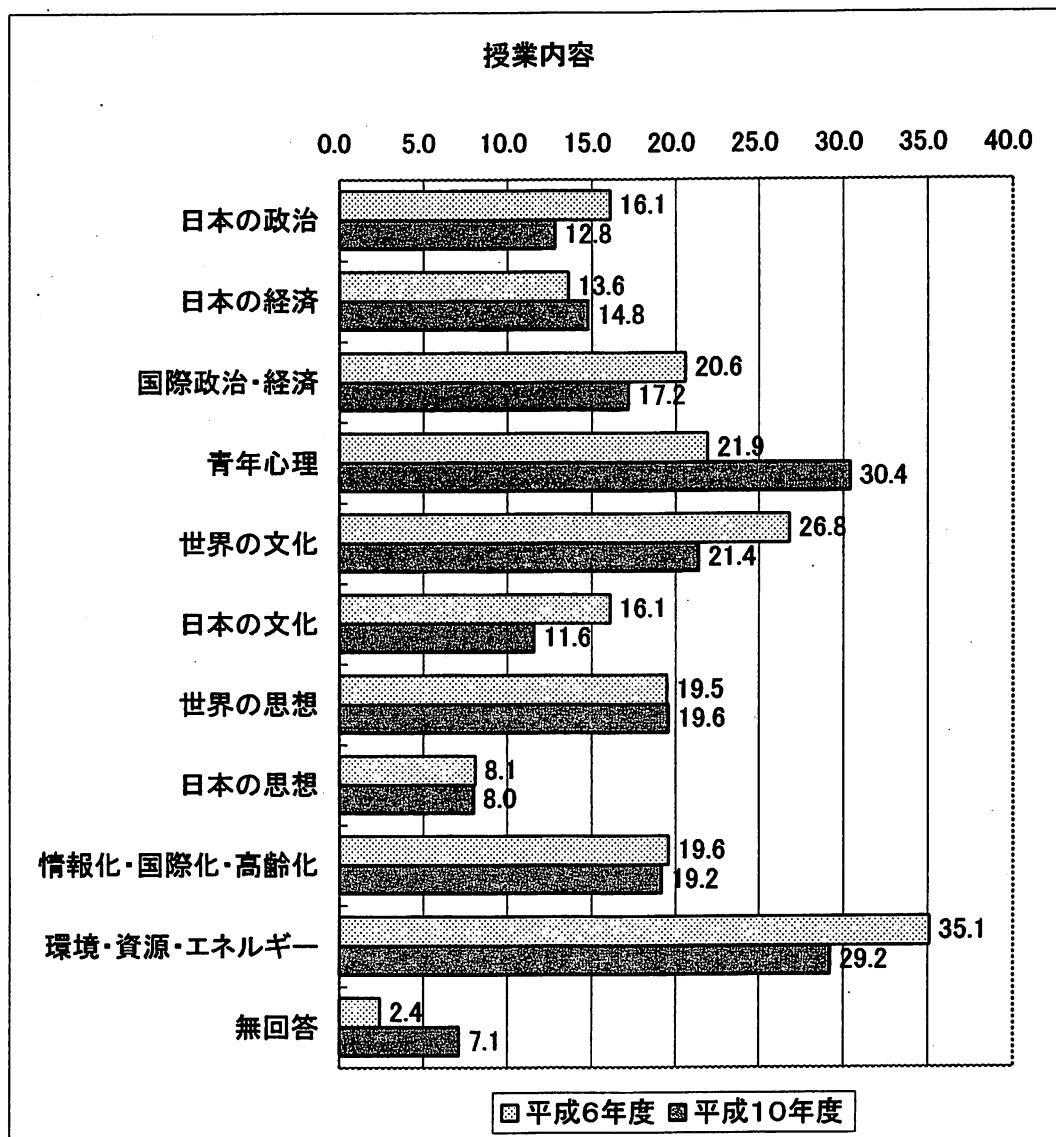


図 2-8-2. 「公民科の授業でしてほしい授業内容」

9. まとめ

本調査の調査項目は多岐にわたっているので、全体を通しての「結論」をまとめることは適当ではない。これまで8つのトピックとしてまとめてきたことが、それぞれの「結論」になっているということになる。

とは言え、まず今回の調査で再び、あるいは新しく採用した、3つの基準尺度について、ここで総括しておくことは必要であろう。そういう意味での「まとめ」としたい。

まず、自己評価尺度については、これまでも多くの研究がなされてきたところであるが、高校生の適応度や充実感・幸福感を知るための有効な指標であることが、改めて確かめられた。

また、「行動決定の基準」や「自他の関わりについての傾向」のいずれも、多くの項目で統計的に有意差のある基準尺度になることが明らかになった。

(なお、今回の調査でも前回同様、分析段階では統計的検定を行なって有意差の有無は確認しているが、もともとケース数が非常に多く百分率の比較で十分な場合が多いため、報告書にはいちいち記載しなかった。)

そこでわれわれにとっての課題は、適応度が低かったり、充実感・幸福感が得られていない生徒に対して、どのような援助が効果的かを考え、実践することであろう。「自己評価の低い」生徒は、自己効力感や自己価値感が低い。「快樂原則」で判断する生徒は、かえって満足が得られずに悪循環に陥っている。「わがままタイプ」の生徒は孤立的であるから、他者との関係性が薄く、ここでも悪循環が生じる。

しかし、こうしてみると、自己評価のところでも触れたような、「自信」と「自尊」が一つのカギなのではないか。自分が何かの役に立つ、自分のしたことが影響力をもつ、自分が大切にされている、などの経験を、いかにして持たせるか。もしそれが家庭や地域で果たせていないとするならば、何とかしてそのような機会を、学校で実現することはできないだろうか。個人としても集団の一員としても居場所が持てて、存在感がある、そういう場所として、学校が機能することはできないだろうか。日々の授業やホームルームや行事、クラブや生徒会活動などを、そのような観点から捉えなおしてみることがよいのではないだろうか。

授業場面に限って言えば、できる限り「参加型」や「交流型」の授業を工夫するのが良いのではないだろうか。それも、旧来のグループ発表のように参加の度合いに濃淡が生じるのでは、結局、自己評価の低い生徒は取り残されてしまうであろう。何らかの形で役割を持たざるを得ないような方法や、どのような意見でも目に触れるような方法は、本研究会におけるこれまでの実践報告でも、いろいろと紹介され、蓄積されてきている。そのような授業の積み重ねによって、彼らの「自信」と「自尊」を高めていく可能性を模索する

ことが、われわれの務めではないだろうか。

最後に、分析をしていて「はっきりとは言い切れないのだが、気にかかったこと」として、これもすでに述べてきたことであるが、挙げておきたい。

自己評価が、高いほうと低いほうに分化する傾向があるかもしれないこと。

職業意識の高まりが著しいなど、女子の意識の変化に比べて、男子のいわば保守的な傾向が感じられること。

社会的な関心よりも、自己への関心が強まっているかもしれないこと。それが閉鎖的・排他的傾向をもっているかもしれないこと。

これらは、質問項目や回答方法などのマイナーチェンジがあったために、判断を保留した項目であるが、否定しきれないので気がかりな部分である。このあたりも日々の学校の現実とすり合わせて、考えていく必要があるかもしれない。

とは言え、この調査はまた、高校生の明るさや、健全な興味や問題意識の所在を物語ってもいる。自己評価の高いグループ、道徳原則を優先して判断するグループ、自律性の強いグループもまた確かに、われわれの目の前にいるのである。たとえば少年犯罪の増加などに耳目が集まりがちな昨今の情勢ではあるが、生き活きとした彼らの芽を摘むことなく伸ばしていくこともまた、われわれの重要な仕事であることを、再確認しておきたいと思う。